481

特253
666

海軍大將 男爵 安保清種 講述

東郷元帥と日本海海戰

元特命全權大使 本多熊太郎 講述

所謂一九三五—六年の危機

財團法人 軍人會館事業部

始

特253
666

東郷元帥と日本海海戰

海軍大將 男爵 安保清種

所謂一九三五—六年の危機

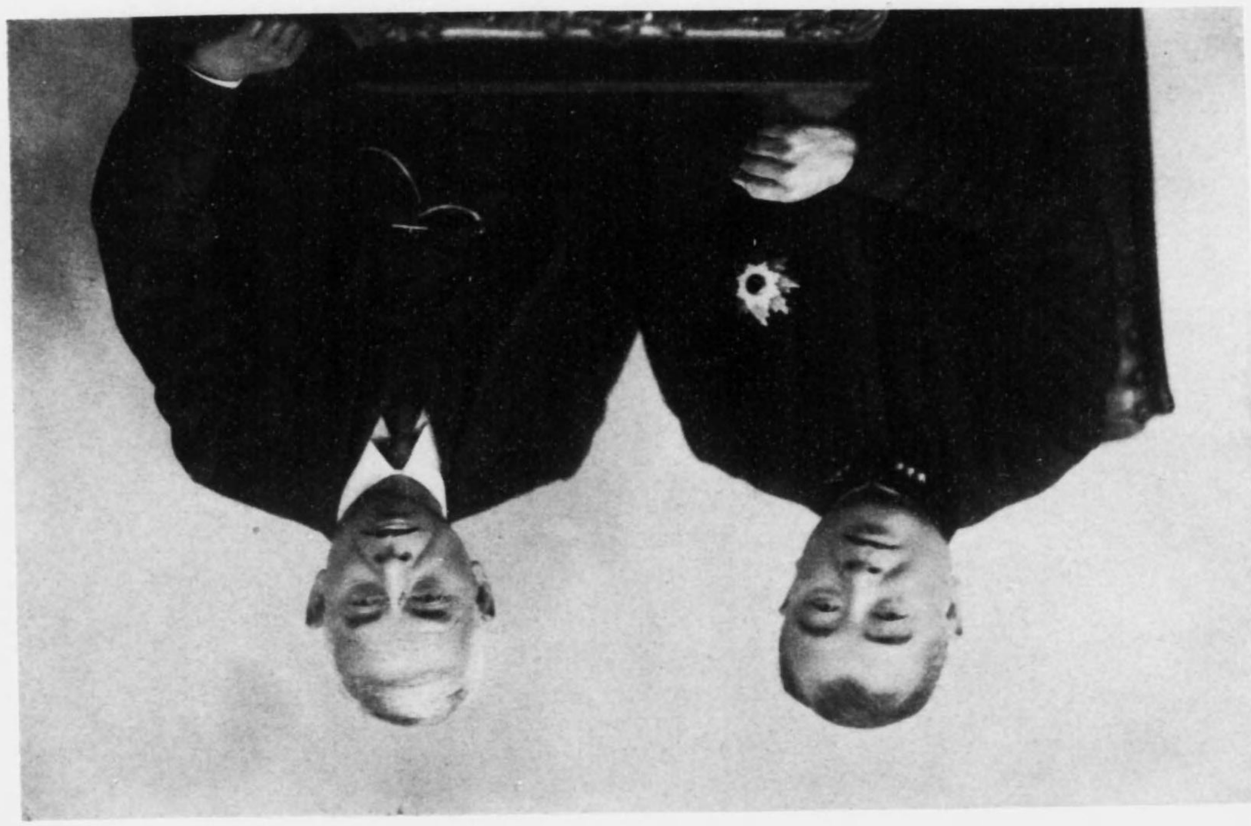
元特命全權大使 本多熊太郎

財團法人 軍人會館事業部

昭和九年 帝國圖書館藏

護國の軍神—故東郷元帥

故元帥は大正三年十一月四日より昭和九年五月三十日まで帝國在郷軍人會の會老であられた。



氏　兩　の　述　講

向ツて左は安保海軍大將、右は本多氏

はしがき

帝國在鄉軍人會本部は、日本海々戰の閉幕日――五月二十八日を選んで軍人會館大講堂に「日本海々戰を偲ぶ夕」を開催した。蓋し海戰第二十九周年を記念して聖將東鄉元帥の偉績を追憶し、且つ當時皇國が興廢の岐路にあつた情勢と、邦家多艱の現況とを比較考察して國民の一段奮起を促さんとしたものである。然るに、前日突如として元帥の病篤しとの悲報が傳へられたゝめ、國を擧げて憂愁の雲に閉されつゝも國民は唯々回春を祈念してゐた際であつたから、聽衆は堂内に溢れて熱誠に終始した。何ぞ料らん講演後僅に三十餘時間にして、薨去の訃音に遭はうとは。

海戰と元帥とについて語られた安保海軍大將は、日本海々戰に旗艦三笠砲術長として偉勳を現した將軍である。千載に誇る海戰の實話や、未だ世に知られなかつた元帥の武威を明朗なる音聲で說かれたとき、聽衆の腦裏には感興が津々として湧き、元帥に對する景慕の念を更に高め、滿場肅として音なき緊張を示した。

所謂一九三五―六年の危機について述べられた本多氏は、曩に特命全權大使として獨逸に駐劄

目　次

東郷元帥と日本海海戰……一
東郷長官の心算……一
東郷長官の深慮……四
戰勝の原因……七
傳統的精神の偉大性……九
武備の威力……一四
海軍の猛訓練……一五
日本精神で進め……一七
所謂一九三五―六年の危機……二一
先づ制海權を……二一

された外交家出身である。同氏が國際政局に對する得意の洞察力と率直なる快辯とを以て所見を開陳されたとき、聽者は拍手を以てこれを讃嘆し且つ酔ふが如きものがあつた。

斯くて講演會は大成功を告げ洵に意義深き催しであつたが、兩氏の講述は聽衆約二千のみが私すべく餘りに貴重であることを痛感した。依つて速記を印刷に附し、こゝに本書が生まれたのである。

今や重大時機に臨み、國民尊崇の的として時代を超越し、萬邦敬仰の標として世界を風靡せる我が東郷元帥は亡く、その赫奕たる誠忠を歴史に彩るのみとなつた。茲に生前本會の會老たりし元帥の英靈に、本書を捧げ以て敬弔の誠意を表する。

昭和九年五月三十日

帝國在郷軍人會本部

三十年前の危機……二三
現時の危機……二五
大和民族の意氣……二七
二つの誤れる思想……三一
日本と聯盟……三五
委任統治問題は……四一
滿洲問題は……四六
三十五—六年の危機とは……四九
國防自主權……五二

東郷元帥と日本海海戰

海軍大將　男爵　安保清種

東郷長官の心算

回顧すれば、二十九年前の昨日から今日に掛けて戰はれたる日本海々戰は、眞に我が日本の國運を賭けての一大決戰であつて、聯合艦隊の將兵は全く必死の覺悟を以て奮戰いたしたのであり、當時を追想すれば洵に血湧き肉躍るの思ひが致すのであります。實際「皇國の興廢此の一戰に在り」で、艦隊司令長官としての東郷さんに於かれては、固より深く心に期する所があり、隨分と思ひ切つた必勝的決戰を企圖せられたのであります。時も時、東郷老元帥の重態が傳へられまして、吾々國民として邦家の爲に誠に痛心の至りに堪へません。何卒一日も早く元帥の御本復に相

成る樣皆樣と共に衷心より御祈りする次第であります。――（滿堂肅然）

さて、その東郷さんの計畫と申すのは、五島列島の沖から浦鹽の沖に掛けて六百浬に亙る海面を、所謂七段備への戰法で、四日三晩ぶつ通しで敵に息をもつかせず、晝戰夜戰と連續交互に戰ひぬいて、一艦一艇も餘さず、敵の艦隊を全滅してしまはうと云ふのが、東郷長官の心算であり計畫であつたのであります。

扨て愈々敵と相見えての實戰舞臺となりますると、之は又お膳立に一段と縒を掛けての猛烈さで、全く眼の覺めるやうな合戰ぶり、水も漏らさぬ七段構への戰法は悉く思ふ壺に嵌まつて、而かも第三段、第四段、第五段の三段だけで見事に所期の目的を達成したのであります。即ち戰さは第三段から始まつたのであつて、其の第三段である對島沖の晝戰は廿七日の午後二時を以て開始せられ、激戰實に五時間餘に亙り、さしも頑强の敵艦隊を散々に擊破して、敵の旗艦スワロフを初め七隻を擊沈し、日の將に西に沒せんとする午後七時半、敵の戰艦ボロヂノが我が砲彈の爲に爆沈したのを最後として戰場を夜戰部隊に讓り、戰鬪艦と巡洋艦の各戰隊は茲に其の合戰を切上げ、何れも翌朝の豫定戰場たる鬱陵島の南方に向つて急いだのであります。

そこで戰さは第四段の夜の戰に移り、我が驅逐隊及水雷艇隊四十餘隻は北方、東方、南方より三面包圍の姿勢を以て、所謂意氣衝天の勢で飽く迄敵に肉薄し、晝の戰ひに傷いて疲勞困憊せる敵艦隊を縱横無盡に駈け惱まし、遂に其の四隻を擊沈したのであります。

明くれば第五段の鬱陵島南方二十八日の晝戰である。即ち二十九年前の今日、これは又前日と違つて誠に天氣の好い、追擊には以て來いの展望百パーセントの戰さ日和で、日本海の此處彼處には忽ち劇烈なる總追擊戰が開始せられた。戰場の廣袤實に二百浬に亙り、大小の合戰無慮八場面に及んだのでありますが、中に就いてその最も目覺しかつたのは、我が主力艦以下各戰隊の二十八隻が八方よりネボカドフ艦隊を包圍し、遂に之を降伏せしめた壯絶無比の第四合戰と、敵の司令長官ロジエストウエンスキー中將が旗艦スウオーロフの沈沒前に驅逐艦ベドウイに移乘し、浦鹽目指して逃走を急ぎつゝあるとも知らず、我が驅逐艦連が之を發見追擊して遂にロジエストウエンスキー長官諸共其の驅逐艦を捕獲した、いとも花々しい第九合戰とであつて、絶大の收獲を以て此の海戰の幕を閉ぢたのであります。――（拍手）

東郷長官の深慮

丁度このネボカドフ艦隊降伏の場面に、三笠の艦橋では一つの記憶すべき……歴史劇的の一こ幕が演ぜられたのであります。當日は、三笠では七千メートルから戰闘を開始したのであるが、戰闘を開始して未だ幾何も經たぬ午前十時四十五分頃であつたが、秋山中佐參謀は敵の艦隊の檣頭に飜つた「我れ降伏す」こ云ふ萬國信號を逸早く認めて、東郷さんに向つて

『長官！　敵は降伏しました。我が艦隊の砲火を中止いたしませうか？』

こ伺つたが、東郷さんは例の通り左手に確かこ長劍の柄を握り締め、右手に持つた双眼鏡を胸の邊に置き、ジッこ敵方を見詰めたまゝ、默然こして一向許さうこもされない。秋山參謀は艦橋の甲板を地團太踏まん許りに聲も鋭く、

『長官！　武士の情であります、發砲をやめて下さい。』

こ息をはづませて詰め寄つて居るが、東郷さんは愈々冷然こして

『本當に降伏するこなら、その艦の進行を止めんけりやならん、現に敵はまだ前進して居るて

はないか』

こ言つて頑こして聽き容れられない。これには流石の秋山參謀も一言もなかつた。實際、敵の艦隊は微速力ながら行進を續けて居るのみならず、その艦隊幾十門の大砲はズラッこ並んで、發砲こそしないが其の砲口は何れも日本艦隊の方に向いてる。或は我が艦隊に近づいて不意に魚雷攻撃を加へないこも限らない。殊に輕巡洋艦のイズムルードは獨り列を離れて脱兎の如く前方に拔け懸けして居る。その行動は魚雷發射に對し頗る疑ふべきものがあるので、我が艦隊は一時之を避けて非敵側の方向に舵を取つた程であつて此の場合東郷さんが輕々しく戰闘中止を許されなかつたのも實は尤もの次第であつたのである。あこから分つたここであるが、降伏したネボカドフ司令官の日誌の一節にも、『露國の艦隊が降伏の信號を掲げたけれごも日本の艦隊は毫も發砲を中止しない。そこて降伏信號のほかに更に日本の國旗を檣頭に掲げ且つ機關を停止せしめたこころ初めて日本艦隊の發砲が止まつた』こ記して居るのである。

斯くて東郷さんは、敵の艦隊が愈々停止し、四圍の狀況其の降伏が確實こなつたので、初めて全軍に戰闘中止を命令せられ、折よく附近に來合せて居つた雉こ云ふ水雷艇を呼んで、秋山參謀

を敵の旗艦ニコライ一世に差遣し、ネボカドフ司令官と會見せしめ之を三笠に招致し、茲に降伏が成立したのであります。白髪白髯のネボカドフ司令官が、頭に負傷して繃帶した將校も混つて居る六七人の幕僚を伴つて、三笠の外舷を綱梯子から悄然として這ひ登つて來る其の光景には、實際何とも言ひ知れぬ感慨に打たるゝのであつて、如何に戰ひに氣の張つて居る我々も覺えず面を蔽ひ眼にはおのづから血涙が滲み出るのであつた。扨ても戰さは勝つか死ぬるか二つの外ないことが、切實に痛感されるではありませんか。

何に致せ、前日來の戰鬪は確實に我が艦隊の大勝に歸し、今や其の最後の一と幕を結ばんとして堂々たる我が艦隊廿八隻を以て敗殘の小敵ネボカドフ艦隊五隻を包圍して居ると云ふ實況で、實は鎧袖一觸と云ふところであつた。

此の場面に處して東郷さんが事を苟もせぬその愼密周到さ加減は全く別物であつて、之が前日大擧突進して來る敵全艦隊の直前に於て、彼の大角度の正面變換を斷行した大膽不敵の司令長官と同一人であらうとは、どうしても思はれない位、此處が即ち、大敵と見て懼れず小敵と見て侮らず、愈々勝つて愈々兜の緒を締め、折角の此の九仞の功を一簣に虧いてはと云ふ、流石に東郷

さんの細心深慮の存する所が見られるのであります。一方に於てはまた智謀神の如き秋山參謀が殺氣漲る合戰場裡に示した血あり涙ある大和武士の眞に優しき情の一面が窺はれるのであつて、兩雄の面目躍如として今も尙ほ眼前に彷彿たるものがあるのであります。

戰勝の原因

斯樣にして此の日本海々戰は、一擧にして露國艦隊を全滅し、日本海は申すに及ばず、東洋方面の海上權を完全に我が手に收めることになり、我が國民の生命財産の安固を確保するは勿論、海外貿易、海上交通等は絶對に安全となり、在滿洲の我が幾十萬の野戰軍に對しても全く後顧の憂なからしめたと同時に、茲に平和克復の氣運が此の日本海々戰を一の限界として萌し來り、遂に日露戰爭を終局せしむるに至つたのであります。

申す迄もなく此の日本海々戰の奇蹟的大勝利は、東郷長官の戰鬪報告に明記してある通り、一に我が　大元帥陛下の御稜威の致す所、殊に我が艦隊の損害死傷が非常に僅少であつたことは歴代　神靈の加護に依るものと信仰するの外なくと申されて居り、正に其の通りでありまするが、抑

抑又日清戰爭の當時血を流して折角我が手に入れたる遼東半島を、むざ〳〵支那に還附せなければならんことに相成つた所の、彼の露、佛、獨の三國干涉に對して、我が國民は誠に怨骨髓に徹し、爾來十年間一劍を磨いての臥薪嘗膽は眞に我が國民全體が一致しての眞劍ぶりであつて、一日汗水を垂らして働いた後の折角の一合の晩酌も五勺に減らし、扨ては御婦人の最も大切にする髮結ひ錢や紅白粉の資に至るまで節約して、自らは食ふや食はずの貧乏世帶に甘んじながら、一方に於ては實に立派な然かも釣合ひの取れた最新式艦隊を準備致したのであります。——(拍手)この我が國民の一念込めたる海軍々備の全能力を、東鄕さんが練りに練つて遺憾なき迄に戰場に活用したことが實にこの海戰に勝つた原因の一つであります。更に今一つは、當時の我が國民は心の底から擧國一致の日本精神を發揮して、出征軍を絕對に信賴し、之に同情し之を援助し物質的にも精神的にも至大の後援を效し、出先の艦隊將士をして全く後顧の憂なく、一同喜び勇んで死に就くを得せしめたこと、即ち全艦隊幾萬の將兵が總て其の後事を國民に托し、且つ自分等の盡しつゝある職責は國民が十分に認識して呉れて居ると云ふことに安心して、全く何等の心殘りもなく、所謂一死報國、唯々自分を空しうして必勝の信念を以て敵に當り得た其のことが、またこの

海戰に勝つた他の主因であつたのであります。詰りこれ等の主因が相俟つて愈々と云ふ場面に夫れ〴〵發揮せられ、玆に曠古の大勝を贏ち得たのであります。——(拍手)

此處が最も大切な點で、畢竟するに戰ひの勝敗といふものは、國民の平素からの準備と、奮つて戰場に立つた者の働きと、之をして好く戰はしむる國民の後援……この三つの總和如何に依つて決するのであります。況してや將來の戰爭は、眞に國力を擧げての戰爭であつて、本當の國防と云ふのは、軍備そのものと、その軍備を實際に十二分に活動發揮させる國民の精神的並に物質的の力の加はつたものでなければならんのであります。今日我が國に於て一九三五年乃至三六年の危機と云ふことが津々浦々に迄傳へられて、國民一般の緊張と努力が絕叫せられて居る所以の意義も蓋し此處に在るのであります。

傳統的精神の偉大性

この國民の精神的方面の中に在つて特に大切な要素は國家の傳統的精神であつて、之は國家として亦國民として何んとしても忽に見過すことの出來ないものであります。

さあ、さう云ふ譯でありますから、その國の國體が如何なる國柄であるか、或は其の國の古來からの歴史は如何であるかと云ふことが極めて大切となつて來るのであつて、一夜作りで建國の出來たやうな國や、或は色々な寄り集まりで成立した混成的な國などは、如何に大國であつても如何に強國であつても、そこに傳統的精神と云ふ本當の底力がないのであります。

過般の世界大戰に觀ても明かであります。露國は聯合國側の極めて有力なる一員であり、その國民は所謂スロー・モーションで誠に鈍重ではあるが、併し兵數に算し得る國民の頭數は無盡藏とも云ふべく、當時英佛あたりの評判では、露國は進んで來るのは遲いけれども、恰も道普請の石碓のやうにジリ〳〵と一歩〳〵地歩を占めて遂には終局の勝利を得るだらうと云つて、國民の頭數の寡いのを特に氣にして居つた英國や佛國の如きは實際非常に露國を賴みにして、心待ちにその西進の一日も早からんことを鶴首待ちあぐんで居つたのである。開戰から二年後の大正五年(一九一六)年に、英國の陸軍大臣キッチエナー將軍が七十五歳の老軀を提げて、巡洋艦ハンプシヤーで露國を訪問せんとして、北海の沖で其の軍艦の沈沒と共に悲慘な最期を遂げられたのも、實は露國の進軍が餘りに遲いのでそれを鞭撻せんが爲に外ならぬのであつて、英國や佛國方面の

苦心は誠に慘澹たるものがあつたのでありますが、その期待は悉く外れて、大正六年二月、開戰以來僅か二年半にして、露國は自分自身忽然として崩壞してしまつたのであります。墺國は元來國家としては由緒ある古い帝國であるが、最早末期となつて居り、その基礎も弱つて、何時と云ふことなしに崩れて、國としての實力は最早なくなり、唯獨逸に引摺られて僅かに動きを見せて居つたに過ぎないのであります。

伊太利は相當準備をした後に十箇月ほど遲れて參戰したのであるが、大正六年(一九一七年)の十月、獨逸のベロー將軍が獨墺の精鋭三十六箇師團を提げて伊國の北方から殺到し來つた時には一堪まりもなく大敗北をなし、夫れからの伊國は最早全くだめであつて、此の時を以て事實上軍國としての伊太利は崩壞してしまつた譯で、參戰後二年五箇月に過ぎぬ。

獨逸は流石に軍國であり、聯邦の中でもプロシヤの如き傳統的に尙武の國が中心となつて居る程あつて、中々粘り强く五箇年を持ち堪へたのであつたが、すつかり世界から封鎖されて糧道を絶たれてしまつては雖逝かずで遂に自ら崩壞して降伏しなければならんことになつたのである。

佛國は流石にナポレオンと云ふ傑物を出した國だけあつて、弱いやうに見えても中々底力があ

り、根強く最後まで强靱に押通して結局勝つには勝つたが、實はあれが精一杯であつて、もう少して危いと云ふ所であつた。

そこに行くと英國は何と云つても國柄が違ふ。羅馬帝國時代やノルマンの來寇は疾うの昔として、兎に角その國土は九百年來未だ曾つて他から侵されたことなく、戰爭には負けたことのない傳統的の一つの誇りを持つて居る。世界大戰には隨分弱つてどうなるかと思はれたが、それでも粘り强く最後まで奮鬪を續けて尙ほ若干の餘裕を存して居つたのである。

國家存亡と云ふ樣な危機の場合には、その國の國柄、所謂國體と傳統とに依つて其の國の眞の値打が分るものである。大正十二年の春であつたと記憶しますが、私が國際聯盟の用件で巴里に居つた時に、東久邇宮殿下の所で佛國の有名なフオッシュ將軍の講演がありました。その一節に曰く、

『今度の世界大戰で佛國が遂に最後の勝利を占めたのは、戰線に奮鬪した軍隊の力に依ることは勿論であるけれども、一面に於ては佛國國民が不屈不撓擧國一致の努力をした賜に外ならないと同時に、更に既往に於て吾人の祖先が佛國の爲に犧牲を捧げた其の傳統的のフランス魂の偉大なる力が加はつて、此の戰捷を贏ち得たのである。即ち今は此の世に居らぬ昔からの佛國々民

の草場の蔭からの力が此の戰捷の上に大いに與つて力あるものであつた……』

と。蓋し至言であつて、その國の傳統的精神こそ、その國が倒れるか立つかと云ふ大事な瀬戸際には偉大なる力となつて其の鋒鋩を現はすもので、これほど大切なものはないのであります。

西暦一四二九年、彼のオルレアンの少女ジャンヌ・ダーク、重圍に陷れるオルレアンの圍みを九死の中に救つて、フランス王チヤールス七世を奉じてランスの町で即位式を擧げしめた。芳紀正に十九歳の花の如き少女ジャンヌ・ダーク、彼女は其の翌年は英國軍の爲に捕へられ無慘にも焚き殺されてしまつたのであるが、その烈火の如き殉國の精神は、五百年後の今日尙ほ脈々として佛國々民の血管の中を流れて居る。即ち斯う云ふ種類の事績が偉大なる傳統となつて過般の佛國の大國難を救ひ得たのであります。

我が國民は古來大和魂と云ふ特殊の日本精神に培はれて參つたもので、傳統と云ふことに付ては誠に申分のない崇高なる事績を澤山に持つて居るのであります。例へば楠公父子の忠節の如きその身は或は湊川の或は四條畷の露と消えたのであるが、赫々たるその事績は六百年後の今日忠誠無比の龜鑑として、嚴として我が國民の心を指導しつゝあるではありませんか？　赤穗義士の

事績然り、明治維新當時の志士烈士の事績亦然りでいづれも我が國民の指導精神となり傳統となつて、丹心報國の生きた手本を吾人に敎へつゝあることは爭へない事實である。日本の賴もしい所は實に玆にあるのであります。――(拍手)

武備の威力

さて、日本海々戰以來年を閱することゝ三十年、この間に於ける我が海軍々備の發達變遷には、幾多の委曲があり、華府會議、倫敦會議等の歷史的大津浪もあつたのであるが、大體に於て順當な傳統的の發達を遂げて今日に至つたのであります。かの滿洲問題に關し、國際聯盟に於て十三對一となつても日本は一歩も退かなかつた。最後に四十二對一となつて敢然として國際聯盟を脫退したのであるが、英國にしても米國にしても其處に何とも喙を差し挾まなかつたのは何故であるませうか？ それは我が國民が固く〳〵正義の決心を持して居つたことゝ、國民の信賴に副ふだけの我が陸海軍が嚴として存在し列國を威壓して居つたからであります。――(拍手)

兎に角現在のやうな實兵力を備へて、世界の三大海軍國の一として押しも押されもせぬ地位に

我が帝國を進めたのは、申す迄もなくあなた方國民の力であり、先代以來あなた方國民の軍備に對する正しい認識と不斷の努力の賜であります。今日この機微なる國際關係に在つて、苟も何等の準備も覺悟もなくて唯强がりばかり云つて居つたのでは何の役に立たない、大に戒めなければならぬが、國家萬一の場合、我が陸海軍現勢力の如き此の力强い軍備を提げて我が全國民が一團となつて邁進すると云ふ大決心と、一朝有事の際に其の變に應ずるだけの各般の準備が講ぜられてあるとしたならば、これほど力强い國家はないのであつて、英米必ずしも怖るゝに足らず、國際聯盟亦固より憂ふるの要がないのであります。――(拍手)

海軍の猛訓練

實際、この大切なる御役目を引受けて居る我が海軍は、國民の期待に副ふやうに、ひたすら日夜の訓練に精進しつゝあるのでありまして、過般佐世保軍港外に於て水雷艇友鶴の顚覆と云ふ誠に申譯のない慘事が起つたのでありますが、畢竟するに、これも夜に日を繼いでの必死の猛訓練から生じたる一の出來事と觀るの外ないのであります。皆樣の一週は日月火水木金土であつて、

土曜日は半休、日曜日は休日と云ふ譯で、家族連れの一日の慰安も心の儘でありまするが、艦隊に在つては、日曜は月曜と同じく一日働く、土曜日は金曜日と同じく一日働いて、皆樣の「日月火水木金土」の代りに「月月火水木金金」と唱へて、脇目も振らず訓練に熱中して居る實狀なのであります。——(拍手)實に我が海軍の將兵で此の「月月火水木金金」と云ふ艦隊言葉を知らない者はない位で、我が海軍の將兵が身を粉に碎いて最善の努力を致しつゝあると云ふ點に付ては、國民の御安心が願へると思ふのであります。——(拍手)

一體我が海軍が何故に戰時にも增して平時に斯くも烈しい猛訓練を實施しなければならんのかと申せば、かの華府條約並に倫敦條約の比率に縛られて艦隊兵力の不揃へを來して居る爲、海軍が國民の寄託に副ひ護國の大任を全うするには、尋常一樣の訓練では追付かないのであります。——(拍手)この物質的努力の不足を補はんが爲に技の力を人一倍に練ると云ふ主旨から、特に必死の猛訓練を勵みつゝある所以であつて、實際この艦隊の猛訓練は、當然の結果として尠なからぬ犧牲を伴ふのであります。この實情は眼の前にこそ見て居られないけれども、我が國民は宜しく其の點を認識せられて、眞相を曹く諒解せられるやう切望して已まないのであります。——(拍手)

日本精神で進め

さて此邊で一つ、今日の我が日本の姿を眺めて見やうではありませんか。實に我が國は世にも比類なき三千年に亙る光輝ある歴史を有して居り、世界に冠絶せる尊い國體の國であつて、今や日の出の勢を以て世界の國際場裡に大手を振つて濶歩して居るのであります。お互に此の日本と云ふ有難い國に生を享けて日本國民たるの誇りを有すると云ふことは何と無上の幸福ではありますまいか。——(拍手)この日本に生れたと云ふ大なる誇りを有する我々は然らばどうすれば宜いかと云ふに、それは即ち日本精神を眞向に振り翳して舉國一致で邁進すれば宜いのであります。此の日本精神と云ふのは、詰り我が尊き國體を自己の死を以て擁護すると云ふ精神であると私は解したいのである。忠君愛國と謂ひ至誠奉公と謂ふのも其の源は玆に發して居ると思ふのであります。この日本精神、即ち大和魂こそは、我が國利民福を念願とするものであり、東洋の平和、延いては世界の平和、人類の幸福に向つて貢獻せんとするものであります。

人には勿論各個各樣の人格があり特色があり立場がある譯でありますが、我々は單に一個人と

して存在するばかりでなく、又實に日本帝國の一國民として存在して居るのである。從つて帝國の運命と離るゝことの出來ない關係に在ることを明確に自覺せなければならない。即ち國民として自分自身の現在を顧みて、之を自分の國家の現在の實狀と結び着けて考察し、自分は今如何なる立場に在り且つ何をしなければならないかと云ふことを了解するのが最も大切なことである。言ひ換へれば、先づ何よりも自分が日本人であると云ふことを頭に置くことが第一であつて、さうして官吏は官吏、會社員は會社員、軍人は軍人、商人は商人、御婦人は御婦人、學生は學生と云ふやうに、いづれも皆其の現在の職分、現在の立場を認識し全力を傾注して其の現在に最善を盡す、これが即ち日本精神を生かす所以であり、また國家社會に對して最大の御奉公となる次第であります。

凡そ國家社會が立つて居るのは個人〳〵の集團々結の力に依るのであつて、この團結の力が強ければ強いほど國家社會は其の大を爲すのである。そこに強大なる團結の力即ち擧國一致と云ふものが是非とも切要とされるのであります。所謂「柳は綠、花は紅」柳は綠であつても花の紅なるを害しない。寧ろ柳・櫻をこき混ぜて初めて春らしき春の華やかさは味ひ得られるのである。

人々各々その守る所を守つて他を煩はさない所に人生の眞の結合は成ると云はれて居る。これが抑々萬物存在の眞理であつて、社會に於ても國家に於ても、各自が其の立場を守つて他を侵さず、而かも互に理解し同情し、相倚り相輔けて一つの目的に向つて精進する、そこに眞の結合眞の團結は成り偉大なる力を生ずる。これが理想であつて其の力の凝成する所自から擧國一致の實現となり國家に盡す結果となるのであります。而して國家社會が各人に要求する所のものも亦實に茲に在るのであります。

現下、國難〳〵と頻りに唱へられるけれども、國民の總てが日本國民としての各自の現在を意識して、十分の意氣と氣魄を以て勇往善處したならば、一切の問題は必ず解決し得られると信ずるのであつて、そこに我々の賴むべき大和魂は存するのであります。

今此の國家の非常時に際會して、この國難は誰かゞ救つて呉れるだらうと漠然と他人を當てにして待つて居ると云ふことは大間違ひであつて、國家は國民銘々が救はなければなりませぬ。即ち前に申した如く國民各自が何れも日本人たることを自覺して、日本の現狀を正しく解釋して、その立場〳〵に在つて最善を盡し、以て國家に奉仕し國家を救はなければならない。要するに、

日本は此の俺が支へて居るのであると云ふ自覺が國民全體に切要であつて、一人〳〵が皆これ國家の柱であります。從つて非常時日本を救ふのも此の俺の力であると云ふ大自覺を國民の總てが持たなければならないのであつて、この銘々の大自覺を國民の總てが持つと云ふ事こそ、擧國團結の基調であり、國を救ふ眞の原動力であるのである。即ちこの國民の偉大なる團結の力こそ、取りも直さず國防そのものであつて、意義のある眞の國防と云ふのはこれであります。戰爭が起るにしても起らないにしても、この眞の國防があれば今日の日本の國難は救はれる、否、國難なぞは吹き飛ばしてしまふのであります。之を要するに、國民全體が日本國民としての各自の現在を意識して、日本精神を體得して銘々の最善を盡し、國民を打つて一丸とした總親和、總努力を以て邁進したならば、我が日本の前途は洋々として光明が輝き至るのであります。——（拍手）

所謂一九三五—六年の危機

元特命全權大使　本多熊太郎

先づ制海權を

日本海々戰の第二十九回記念日の會に於て、私は安保大將と三四年ぶりで共に講演をするの喜びを得ました。安保大將は御承知の如く二十九年前の今月、昨日並に今日に亙つての所謂皇國の興廢を懸けたる大戰に、旗艦三笠の砲術長として極めて大切な役割を親しく努められた人であります。私は又外交畑の人間で、實はバルチック艦隊の東航以來の情報の蒐集、バルチック艦隊が東亞の海面に進んで來る途中に色々起つた中立違反問題、さう云ふ方面の事務に携つて居つた一人であります。

バルチック艦隊が我が近海に進む頃には世界の輿論は、最早ロシヤは戰運恢復の見込がない、もう迚も見込はないから早く講和するのがロシヤとして賢明であると云ふのでありました。之は旅順陷落以來世界の輿論の動向であつた。そこへ以て來て奉天の大敗北あり、今度こそロシアは目が覺めて日本と講和の決心をするだらうと世界は觀て居つたのであるが、最後の切札たるバルチック艦隊が東洋の海面に段々近づいて來ると共にロシヤは之に非常な未練を感じ、各國の輿論は固より、國内には足許から革命の火すら燃え上りつゝあつたに拘らず、講和しやうと云ふ氣分には中々ならなかつた。若し彼の對島沖の大海戰に於て此の艦隊が假に半分でも浦鹽に逃げ込むやうなことになつて居つたならば、あの際にロシヤは恐らく講和の決意をしなかつたであらう。然るに曠古未曾有の大勝利で、ロシヤの最後の切札たるバルチック艦隊が完全に擊滅されたが故に、さすが頑固の露國皇帝も我意を折つて遂に講和に應じた。兎に角あの日本海の大勝利で日露戰爭約二年間の連戰連勝の我方の果實を完全に收めることが出來たのである。戰さの大部分が陸上で行はれるにしても、又ロシヤのやうな大陸國・陸軍國との戰であつたのではあるが、日本が或る一の大國と國運を賭して戰ふを餘儀なくされるやうな場合には、今後と雖も日露戰爭と同じく、戰爭の

初期に戰鬪の舞臺となるべき海面の制海權を先づ我が海軍の手に收め、而して戰爭繼續中その制海權を我が手に確實に握つて——且つ出來得べくんば我が海上權の活動の範圍を擴大して——最後には、陸上に於て敵陸軍に奉天戰爭程度の壓倒的打擊を加へるのみでは足りずして、海上に於ては敵艦隊に全滅を加へなければ戰果を全うすることは出來ない。日本の地理的環境よりして我が國運の懸かる所は海上に在ると云ふことは爭ふべからざる眞理であると思ふ。

三十年前の危機

日露戰爭は、明治二十八年四月の馬關講和條約にロシヤを主とする且つ武力を背景とする所謂三國干涉を受けて以來、何時かはあるものとして、日本は上下一致臥薪嘗膽十年、以て萬一の變に備ふると同時に其の間所謂外交工作を以て日露間の關係を疏通打開する爲に出來得る限りの努力を試みたのであるけれど、明治三十七年二月十日露國に對する宣戰の詔勅に御示しになつて居るが如く、

半歲の久しきに亙りて屢次折衝を重ねしめたるも露國は一も交讓の精神を以て之を迎へず、曠

日彌久徒に時局の解決を遷延せしめ、陽に平和を唱道し陰に海陸の軍備を增大し以て我を屈從せしめんとす。凡そ露國が始より平和を好愛するの誠意なるもの毫も認むるに由なし。露國は既に帝國の提議を容れず、韓國の安全は方に危急に瀕し、帝國の國利は將に侵迫せられむとす。事既に玆に至る帝國の平和の交渉に依り求めむとしたる將來の保障は、今日之を旗鼓の間に求むるの外なし。

謹んで今日の言葉に飜譯すれば、外交工作に依つて達せんとしたる目的は最早武力に依つて達するの外はないと宣はせられて居る。この日露戰爭は、少なくとも武力方面に於ては日本に十數倍する國力を持つて居る大國に向つて、帝國の自衞の爲に已むなく國運を賭したる戰であつた。日露戰爭こそは日本が初めて直面したる非常時であり帝國の危機であつた。この危機を乘切つたのは申す迄もなく叡聖文武なる　陛下の御懿德　皇祖皇宗の御神靈の御加護と、我が立場の正義なることと及び日本の正義觀を徹底せんとする精神に依つて臥薪嘗膽十年間に固められたる上下一致の意氣、之に依つて今から二十九年前に危機を立派に乘切つたのである。

現時の危機

今日再び日本は非常時中の非常時に直面して居る。この非常時なるものは、德富老先生の言に依れば——我々はまだ非常時と云ふもの、門前の叢（くさむら）を歩いて居るに過ぎない、門内にすら入つて居らぬのに、もう非常時と云ふものなんぞは好い加減に打切つた方が可くはないかと云ふやうな倦怠氣分が世間にあるやうだ——と。私も德富老先生と所感を同じうする。昭和六年九月十八日滿洲事變の突發を非常時の開幕とすれば、それから足かけ三年にもなる、もう好い加減に非常時を打切つてしまふ方が可からうと云ふ氣分を日本が起して見ても、此方の心持だけでは非常時解消に出來ない。況んや日本一國の非常時ではない。世界を擧げての非常時であつて、世界の主なる國々が何れも彼等特有の非常時の大波の中に喘いで居るのである。國際的依存關係の今日に於ては、假りに日本自身に何ら固有の非常時的現象或は事情がないとしても、例へば米國の一九二九年以來打續いて居る大不景氣が、日本の二百萬の戶數を算する養蠶關係者に對し、その生活を脅威するが如き影響を及ぼして居る。卽ちアメリカの不景氣が生糸の不況となり、生糸の不況

は製糸家を苦しめるのみならず、製糸家に繭を供給する百姓の臺所を脅威して居る。また他の一例を擧ぐれば、支那は、ロシア一流の革命外交、私に言はせれば一種の攘夷的國權恢復熱が入り込んでからは、初めイギリスに向つて居つた鋒先が轉じて日本に向つて來て、遂に滿洲に於ける彼等の主權恢復と云ふ譯の分らぬ狂熱の爲に、日本が日露戰爭以來滿洲に有する一切の權益と、二十萬の……否な朝鮮の同胞を入れて百萬を算する我が帝國臣民とを一掃してしまはうと云ふが如き非常に亂棒な國權恢復運動が行はれて、その結果遂に我國は餘儀なく自衞の行動に出た。然るに、この事情に認識を持たぬ國、若くは認識して居つても日本が滿洲に於ける日本の地歩を正當に恢復し更に之を確立することを好ましく思はぬ國が、今から何年前かの空論を繰返すべく、ジエネヴァに於て御承知の如き外交戰を我に對し展開さした。斯くの如く日本固有に何ら非常時的原因がなくても、他國の脱線行爲或は他國に於ける商賣の不況と云ふやうなことが、忽ち此方の國民生活に反響し、或は又滿洲事件の如く餘儀なく國力の發動をしなければならぬやうになる。その發動の結果がまた日本對世界の問題となつて、今日誰が觀ても、三十五・六年の危機とか非常時日本とか云ふことを漠然ながらも何人も考へるやうな事態を持ち來して居る。

大和民族の意氣

本年帝國議會の開會中に現はれた議會内外の言論の大部分は、あゝ云ふ連中が爲にする所の議論であつて眞面目に取上げる價値もなけれども、(拍手)——斷じて聽き棄てにして置けないことが二つあの連中の口から出た。その一つは、非常時だとか危機だとか云ふことを餘り口にし筆にすることは國民の士氣に影響すると云ふことを或る國務大臣が云はれた。即ち、非常時だとか危機だとか言ふと國民は元氣がなくなるから、そんなことを餘り言はない方が可いと云ふのだ。もう一つは、唯さへ聯盟脱退以來色々列國から疑はれて居るのに、まだ非常時とか危機とか言つて居るのでは益々列國の感情を害すると云ふのだ。議會の速記錄に依れば斯う云ふ二つの言說が、責任あり地位ある朝野の政治家の口から出て居る。

その第一の言說に對して私は玆に諸君と共に國民の名に於て嚴重なる抗議を先づ提出して置きたい。即ち非常時とか危機とか言ふと國民が元氣沮喪すると云ふ言說、之は我々日本民族を甚だ意氣地のないものと誤つて觀て居る。まさか御自分が意氣地がないからと言ふのではあるまい

が、(拍手)――日本は今を去る約六百六十年の昔、日本を除くのほかは當時の世界に知られて居つた陸地の殆んど全部即ち歐亞大陸の殆んど全部を征服して自己の支配下に置き、生氣潑剌として名實共に世界的大帝國たる元から、――文永年間から弘安の四年に懸けて十年足らずの間に二度も元の日本遠征艦隊がやつて來た。文永十一年の役には蒙古と朝鮮の聯合軍が潮の如く我に押寄せて來たが、對島・壹岐の如きは僅かに八十人或は百人の守兵が悉く斬死をして敵の大軍に抵抗して居る。また時の執權北條時宗は、入貢しなければお前の爲にならぬぞと云ふ元の無禮な手紙に對して、相模太郎膽甕の如く、大元國の使者を斬つて昂然たる意氣を示した。更に敵が捲土重來して弘安四年にやつて來た時には、敵兵の生きて還る者僅かに三人であつた。當時の元と日本とを較ぶればお話にならぬほど大小强弱の別がある。武器に於て軍隊の編制に於て、戰術に於て遙かに彼に劣つて居つたに拘らず、九州地元の武士は期せずして護國の爲に各自の家の子郎黨を提げて戰ひ、更に鎌倉幕府は拔本塞源の策を取らなければならぬと云ふので、進んで元を征伐に行く大計畫を立てゝ居つた。この十餘年に亙る大國難に大和民族の勇氣は所謂一難を經る毎に一倍し、當時の世界的大帝國をして、遂に日本に對して野望を遂ぐることの不可能なるを納得せしめ

たのである。また幕末から明治初年に掛けての日本は觀方に依つては累卵の危きにあつた。日露戰爭また固より然り。三國干涉を受けた日本人は、十年の中には恐らく再び斯んな目に遭ふだらうから、その時こそはロシヤの横暴を見事に叩きつけて見せるぞと、正義の一劍を磨き、而して日本は意識して行つた譯ではないけれども、十五世紀以來漸次完成されつゝあつた白人の世界支配を極東の一角に於て喰ひ止め、日露戰爭の一擊に依つて之に鞭を入らしたのである。(拍手)――この榮ある民族が今や現實に危機に直面して居るのである。之に向つて、危機とか非常時とか言へば國民が意氣沮喪するから言はない方が可いとは何たることか。(拍手)――問題は、言ふことの可否ぢやない。果して危機なるものが存在するや否やである。存在するならば國民にハツキリ知らした方が可い。若し存在してゐないのならば、言ふたからとて夫は所謂風聲鶴唳だ。危機が存するや否やこそ問題であるのだ、唯漫然と危機なぞと言はない方が可いと言ふに至つては何のことか判らない。――(拍手)

次に、あまり危機呼ばはりをすると西洋諸國の誤解を招くと云ふ言說、之も譯の判らない話だ。隣から火を付けた、だから火を付けたのは隣の奴だと言ふことが何故に火を付けた奴の感情を害

するか。どうせ火を付ける位の奴だから、注意を促しても、別に先方の感情がそれ以上に惡くなりようはなからうと思ふ。(拍手)今日の國務大臣とか政治家とか云はれる御連中の識見議論と云ふものは大抵この程度のものだ。(拍手)

彼等の中でも頭腦明敏を以て聞ゆる或る人は、諸君が聽いても尤もらしいことを言つた——先般の議會中——諸君も御記憶であらうが、斯う云ふことを言つた人がある、——危機とは六かしい問題の累積せる狀態を言ふのだ、而して三十五・六年の危機を構成する諸問題は、先づ第一には、明年三月二十七日が來れば國際聯盟規約の文面に依つて日本は聯盟から完全に出てしまふ、即ち名實共に聯盟との絶緣、之は唯ならぬ問題だらう。それから南洋委任統治の問題もある。滿洲國の問題は固よりまだ引懸つて居る。更に三十五年の海軍會議がある。所謂六かしい問題と云へば斯んなものだらうが、皆ごれを見ても外交問題ぢやないか。既に外交問題である以上は外交工作に依つて解決さるべきもので、それ以外に解決方法はないのだ。斯かる難問題の解決方法を外交工作以外に求めんとするかの如く、また求め得るかの如く考へるのであるのは間違つて居る——と。之は有名な政治家が言つたことである。今晩歸つて記憶を喚起されると諸君は誰が言つ

たかお判りになる。此の席で名前を擧げることだけは御本人の爲に差控へて置く。(拍手)これなんぞは此の邊の法律學校の一年生あたりの出しさうな議論だ。(拍手)この議論たるや、二つの誤れる思想から出發してゐる、或は二つの誤れる思想の中の一つから出發して居る。

二つの誤れる思想

誤れる思想の一つとは、外交問題なるが故に外交工作に依るべし——と云ふ言葉の裏を味へば、外交問題だから外交手段で解決出來るものであつて戰爭などと云ふことは問題にならぬ——と云ふ意味が含まれて居る。戰爭などは問題にならぬと云ふ裏を吟味すれば、古今東西の歷史に於て、國運を賭しての戰爭は必ずしも、國家と國家の眞面目な爭ひ即ち外交問題が原因となつたに非ずして、時の政府若くは時の主權者が物好に行つた場合があると云ふ頭……而かも夫は獨り數世紀以來の歷史に於てのみならず、現今の時代に於てもさう云ふ事があると云ふ頭でなければ、今言つたやうな議論は出て來ない筈である。即ち、外交問題に何ら關係せずして物好で叩き合をする場合があると云ふことを前提としてのみ言ひ得ることなんだ。然るにソンナ馬鹿なこと

は、我々よりも戰爭好きなヨーロッパてさへ、この二三百年來は最早ありはしない。況んや我が日本に於ては、明治維新以來、日清戰爭と云ひ日露戰爭と云ひ何れも六かしい外交問題が原因てあつた。維新以來二十七年間、日支兩國の間に引懸つて居つた最も厄介な問題は朝鮮問題だ。朝鮮に對する支那の腹は、あれを屬國として勝手に處分しやう、否な場合に依つては日本征伐の一の策源地にしよう、丁度文永・弘安の時の元の忽必烈の行り方をしようと云ふのだ。朝鮮半島は我が帝國に向つては、人體に譬へれば、恰も我々の最も大切な丹田に向つて横合から短刀を突きつけた格好をして居る。その短刀を、當時の支那の如き日本より寧ろ強いと觀られて居つた程の國が勝手に握つたならば、何時日本の横つ腹に突込むかも知れない。玆に於て日本は、朝鮮を一獨立國として文明國の仲間に日本が紹介して入れよう、卽ち朝鮮を支那の支配下より脫却せしむることは帝國自衛の爲め必要條件てあつた。故に明治政府になるや直ちに朝鮮に向つて、王政維新を告げて舊交を續けんことを促したが、我の言ふことを中々聽かない。玆に於て明治六年には征韓論の破裂となつて、維新の元勳の最も有力な人達が中央から野に下つてしまつた。而かも此の征韓論の爭は政府が二つに割れただけてなく、先づ明治七年には征韓派の江藤新平さんが佐賀に於

て征韓黨と云ふものを作つて、約二萬の佐賀の壯士が勝手に朝鮮征伐をやらうとした。これが明治政治家達の內亂の初てある。明治九年には萩に前參謀前原一誠の亂あり、熊本神風連の一揆、秋月の亂が相前後して起り、明治十年には遂に西南戰爭となり、國家の柱石てあり維新の元勳てあり大君の御覺え最も厚かりし西鄕先生を逆賊として全國の兵を以て討伐しなければならないやうなことになつた。これほどの犧牲を拂つて尙且つ外交工作に依つて平和の間に朝鮮問題を解決せんと努めたのてある。

然るに日本が外交工作に依つて平和に解決せんと努めれば努める程、我に對する淸國の侮蔑的態度は增長して、西南戰爭後十七年目、支那が東學黨の亂に乘じて一擧に武力を以て朝鮮を抑へようとしたが故に、遂に彼の日淸戰爭となつたのだ。日露の間も、馬關條約に對する干涉以來、初は朝鮮、次いて明治三十三年の義和團事變を契機としてロシヤが滿洲を占領して以來滿洲問題といふものが日露間の難問題に加はつた。而して對露宣戰の御詔勅にも御示しになつて居る如く、明治三十六年八月一日より始めて半歲の久しきに亙つて屢次折衝を試みたけれども、徒に時局の解決を遷延せしめて、他方に於て益々武力の擴大を圖り之に依つて我を屈從せしめんとしたので、

帝國が平和の交渉に依つて求めんとした將來の保障は、遂に之を旗鼓の間に求むるの餘儀なきに至つたのである。斯く觀來れば、日本は國家の死活に關する外交問題に原因せずして他國と干戈を交へたことは斷じてない。然るに、外交問題だから外交工作で解決し得る筈だと言ふものは、私に言はせれば、畏れ多くも日清・日露兩戰役の宣戰の御詔勅に御示しになつた聖旨を忘却し、若くは之に修正をすら加へんとする不逞な思想である。（拍手）

二つの誤れる思想の中の他の一つ。なるほど外交工作で問題を解決しやうと思へば出來ないことはない。それは斯うすれば出來る。初は一應日本の正當なる主張、立場を表明して見る、けれども結局向ふではこちらの言ふことを聽いて呉れなければ仕方がないから、先方の言ひなり放題になつて、條約に判を捺して國家の手を束縛すれば解決は出來る。つまり强い對手に對しては、どんな國家の死活に關するやうな無理な條件を押しつけられても長いものには卷かれて居ると云ふ思想、之を西洋の言葉で云へば「ピース・アット・エネー・プライス」（如何なる代價を拂つても平和は買ふべし）と云ふ亡國思想に出發して初めて、あの有名な或る政治家の言つたやうな意見が出るのである。（拍手）

故に、二つの誤れる思想の中、一つは善意に解釋して、歴史の讀み違ひである、即ち論者の無學無識を現はして居る。他の一つは、帝國をして遂に滿洲事變、聯盟脱退、三十五・六年の危機に對する國民的決意を固むるの餘儀なきに至らしめたる、過去十有餘年間の屈辱外交の根本思想を代表して居るに過ぎない。（拍手）以上の事は國民の輿論として此の機會に表明して置く。（拍手）

日本と聯盟

然らば、所謂三十五・六年の危機を構成する問題とは何か。世間には、聯盟との關係、南洋委任統治、滿洲國不承認、來年の軍縮會議等を擧げて、どれも之も六かしい問題であるが如くに考へたり、恐るべからざるものを恐れて重要視すべきものを輕く觀る弊があるが、之等の問題は決して同じだけの重要性を有つて居るものではない。

先づ來年三月二十七日が來たら日本は聯盟と手が切れると言つて恐れる。私に言はせれば、それがドウしたと云ふのだ、何でもないぢやないか。（拍手）昨年三月二十七日に日本が聯盟に離緣狀を叩きつけた時に完全に脱退して居る。所が恐れる連中は曰くだ——そんなことを仰しやつて

も聯盟規約第一條第三項の規定に依つて、脱退通告後二年間は聯盟國としての義務に拘束されるから、二年經たないと眞の聯盟脱退にならぬ、眞の聯盟脱退が二年目に來た時こそは大變なことにならうと。――これは、第一に明治末期以來の形式法學の中毒であり、第二に同じく無學な思想の現はれだ。何が無學かと云へば、聯盟はドウして出來たか及び聯盟規約の第一條第三項はドウ云ふ意味で出來て居るかと云ふことを研究してゐないからだ。之を詳細に述べる時間はないが、要するに、あの聯盟を拵へる時には世界中の國が皆入れる積りだつた。アメリカの大統領ウイルソンが態々出掛けて行つて、嫌がる各國に無理矢理に仲間をさせて判を捺させた聯盟規約、及び之を基礎とするヴエルサイユ條約を、アメリカの批准機關たる上院が否決して、肝腎のアメリカが這入らない。ツマリ國際聯盟と云ふものはウイルソンが生んだ赤ん坊なんだが、この赤ん坊をウイルソンの本家たるアメリカが、コンナものは俺は認知しない、況んや戸籍に入れることは相成らぬ、之は宜しくスヰスのジエネヴアとか云ふ田舍の町に棄ててしまへと、（拍手）アメリカの棄て子が即ちジエネヴアの國際聯盟なんだ。だから初から之に贊成したイギリス●フランス●日本などとしては今更嫌だと言へないから、今にアメリカも入つて呉れるだらうと待つて居つたのだ

が、未だに入つて呉れさうもない。

抑々日本の國運に關係ある國は何處かと云へば、ロシヤとアメリカだ。支那と云ふ國はお氣の毒ながら外交の主體たる資格はない。他國の外交の對象としてのみ觀るべき國である。從つて日本と云ふ屋臺に付く火は何處から來るかと云へば、それはロシヤから來るかアメリカから來るかである。そんな氣遣ひはないとドチラも口を拭ふては居るが、それ以外に火を付ける者はゐない。然るに此のロシヤとアメリカが入つてゐない火災保險相互組合に（笑聲起る）、日本が入つて居るのは何の事か意味を成さぬ。イギリスが日本に火を付けに來ることもなからうし、焉ぞ況んや他の國に於てをや。そんな連中と相互保險の申し合せをしたからとて、肝腎の隣のロシヤとアメリカが相互保險の義務を負うて居らないのだから、何の役にも立たない。誰が何と云つても世界のことは大國政治だ。昔は八大國であつたが世界戰爭でオーストリヤが沒落してしまつたので、現今はイギリス●フランス●ドイツ●ロシヤ●イタリー●日本●アメリカが世界の七大國である。例へば日本の如きはヨーロッパの二等國（と云つても彼等が一流の文明國であると云ふことは私も認める）を十五六合せた位の重要性と力を一國で有つて居ることだけは事實だ。日本よりマダ

力を有つて居る國が主觀的にはある。遺憾ながら客觀的にも或る程度まではあるかも知れない。さにかく世界を引摺つて居るものは大國なんだ。

然るに此の七大國の中聯盟に入つて居るのはイギリスとフランスとイタリーの三國だけ、他は、生みの親たるアメリカは戸籍に入れることを拒んで棄て子にした、ロシヤは共產主義を腕づくて世界に押し着けようとして居るから入らない、ドイツは謹愼の狀が見えるまで除け者の形にされて居る。而かも聯盟規約なるものは世界中の國がやがて皆入る積りで拵へたのであつて、如何に偉い國であらうとも或る一國が聯盟と本質的な問題で正面衝突をすると云ふやうなことは有り得べからずと云ふ頭で出來て居るから、そんな場合を第一條第三項に規定したのではなくて、所謂都合に依つて退會する連中の爲の規定なんだ。メキシコが事務費分擔が拂へないから出たり、ブラジルが理事國にして呉れないからと云つて出たり、さう云つた場合はあの規定で可い。併し先般の日本の場合は、聯盟離脱の御詔勅にも仰せになつて居る如く、東洋平和の根本義に關して聯盟と觀る所を異にした爲、聯盟と手を別つて帝國の所信に從ふの已むを得ざるに至つたのであつて、聯盟の生命であり使命である世界平和と云ふ大問題に關して、聯盟の創立者の一大國たる日

本が聯盟と正面衝突をすると云ふやうな場合に當て嵌まる規則は實はない。仕方がないから、脱退するに付ては二年間の會費だけは拂つてやる。會費さへ拂へば文句はなからう。(拍手)つまり夫婦別れをして事實は離婚したけれども、二年間は女房に手當を遣る義務があつて、それが濟むと夫婦關係は終了しないと云ふ可笑しな民法があると假定すれば事柄がハッキリする。夫婦が喧嘩して他人になれば赤の他人より寧ろ仲が惡い。その二人が二年間は手當の義務の點に於て束縛されるだけだ。之を夫婦の本質的義務が二年間あると考へる者があるならば頭の程度を疑はざるを得ない。日本は脱退通告をした時に聯盟とは完全に緣が切れて居る。然るに其の邊の大學教授達の言ふやうに、まだ二年間は聯盟に義務を負うて居るのだと云ふことになると、斯う云ふ不都合が起る、昨年二月二十四日、四十二對一で松岡が席を蹴つて起つて來た決議案……日本を侵略國呼ばりした彼の決議案は、聯盟の議事規則に依つて完全且つ適法に成立せるものであることは一點の疑を容れない。

然るに日本はマダ聯盟國の地位と義務を有つて居ると云ふならば、該決議案に日本が束縛されるものであることを是認するのが論理上當然の歸結である。さうすれば日本が其の後にやつて居

ることは、聯盟の義務を負ふことを認めつゝ、自ら其の義務を悉く故意に蹂躙して居ると云ふことになる。だから、まだ二年間は聯盟に義務を有するなどと馬鹿なことを言ふのは、日本としての自殺的見解であり、事理を解せざる無學の徒の皮相な迷想である。また聯盟を出たからとて孤立はしない。よしんば孤立しても怖いことはない。孤立が情ないと云ふのは、自分の主張することが對外的に通用しないから切めて一人か二人味方があると可いがと云ふ時だけに限る。今日の日本に、孤立の悲哀などと言ふ人間があると、私は夫こそ情ない。(拍手)たとひ孤立であつても、滿洲國を助けて獨立の一國家に爲し、それが不戰條約違反だ、九國條約違反だと聯盟から決議を突きつけられながらも、東洋平和の爲に自己の所信に從つて堂々と抱負經綸を實行して、之に世界誰一人指を差しに來るものさへないではないか。これほど立派な孤立が何處にある。(拍手)無論孤立と云ふことは好ましくないけれども、多くの味方を有つて其の味方から制肘されるよりは、眞の孤立をしても國の使命と信ずる所に向つて邁進出來る環境に在る方が寧ろ可いのだ。一體、國が偉くなれば皆孤立なんだ。イギリスは二十世紀になつて稍々國力が下火になつたので日本と同盟して印度の安全を圖つたのだが、ヴイクトリヤ朝の盛時には「光榮ある孤立」(スプレンディッド、アイソレイション)と號して世

界中を威張り廻つたものである。又彼の世界戰後のアメリカが東洋の事は勿論、ヨーロッパの事までチョッカイを出して、フランスはもう少し軍備を減らせとか云ふ、そのフランスが、それで米國の方は我がフランスの安全保障に責任を持つて呉れるかと訊くと、いや夫は其の時の我方の考量の結果如何に依るなどゝ、責任は毫も負はない。何處とも同盟しようとせず、所謂孤立獨往で世界に號令して來た。——尤もその號令が時々効かないことのあつたことは御承知の通りである。然かるに偉い國は概して孤立であるのだ。日本が今の儘の境遇で居ると云ふことは、感情の上からは面白くないが、實際の力の現はれとしては、國際間に於ては國家として先づ理想的の地位であると言へる。この光榮あると云ふか——少くとも實力ある孤立をドレだけ長く續け得るか、出來れば此の狀態の永續化を見るやうに國力の確立に國民は努力しなければならない。之が今日の問題であると私は思ふ。(拍手)

委任統治問題は

南洋委任統治の問題に付いても、國際聯盟脱退通告の形式的發動が來ると、南洋委任統治がキ

ット問題になるやうに一人で決め込んで居る大學インテリ連や外交評論家があるが、太陽さんが下に落ちて來るこ言つて心配して居るのこ同じこことだ。南洋委任統治のことは六かしいことを言ひ出せば講釋することは幾らもあるけれども、これ位は國民常識として覺えて置いて可からう。即ち、あれは日英米佛伊の五大國が世界中のドイツ植民地の處分を講和條約に依つて決めたのである。その時には國際聯盟はマダない。要するに、いきなり五大國が取つてしまふことはウイルソンが好まないから、ウイルソンの顔を立てる一種の形式——委任統治こ云ふオブラートヲ冠せて皆が分け取りしたのである。(拍手)何も聯盟の理事會から委任統治を貰つたのではない。なるほど理事會から辭令は出て居るけれども、既に其の前に日本は之々、イギリスは之々こ五大國で分配を決めてしまつた。さうして聯盟が出來てから理事會に「コウ云ふ委任狀を出せ」こ五大國が命令したのである。

此の事は日本が聯盟を出てから勝手に言ふ議論ではない。既に七八年前にイギリスのバルフオア卿が聯盟で明かに言つて居る。委任統治は聯盟が創造(クリエイト)せるものではない、受任地域に對する受任國の權利は征服せる土地に對する征服國の權利に外ならないこ。また日本が聯盟を飛び出して

から數月後に、アフリカの或る英國の委任統治領の長官が、本委任統治地域の領土主權は完全に英國皇帝陛下のみが有たせ給ふものであるこ演說して居る。之はイギリス側の見解である。だから法理上から云つても條約の出來た行き懸りから云つても、聯盟が日本から取り上げるこ云ふことは出來ない。況んや、聯盟國でなくなつたから受任國の資格はないなどゝ、そんなことは絕對にない。論より證據、アメリカが聯盟規約の批准を拒んで聯盟に入らないこ決めてから後に、アルメニヤの委任統治を引受けて呉れこ聯盟からアメリカに交渉したことがある。之は立派な先例だ。而して國際聯盟この關係に關しては之だけのことを覺えて居れば可い、それは一體ドイツの植民地を委任統治こ云ふ形式で分配したのは、ベルギーは小國でアフリカで可なり貰つたが、大國ではイギリス・フランス・日本の三國だ。この三大國の中で最も大きなものを取つたのは言ふ迄もなくイギリスだ。日本は數こそ六百二十三だが皆合せても東京府より小さい珊瑚礁群、尤も別の意味からは非常に重要な所であるけれども、土地の大小、資源の厚薄から云へばイギリスのそれこは比較にもならない。イギリスのは何十萬平方哩、人口百萬に近い。而してフランスが之に次ぐ。所でイギリスにしてもフランスにしても國家である以上、將來永い間には、いつ何時聯盟

と衝突して飛び出るかも知れない。否聯盟を生かさうと殺さうと、日本が既に飛び出した以上は英佛二國でドウでも出來る。今では聯盟は英米の國策運用機關に過ぎない。さう云ふ場合に、若し今茲で聯盟を出れば委任統治地を取上げると云ふ先例を日本の場合に開けば、將來或る場合に最も大きなものを吐き出さなければならないのはイギリスぢやないか。その次はフランスだ。さう云ふ馬鹿な先例をイギリスやフランスが聯盟に作らせる譯は斷じてない。夫をすることは彼等に取つて自殺的なんだ。だから聯盟側から委任統治を問題にして來ることは英佛二大國と雖も……ではない彼等自身の立場上頗る不利だから斷じてあり得ない。勿論聯盟にも、恰も郵船會社あたりの株主總會に出て來る一株だけの雇ひ壯士のやうなものがゐて、我々が名前も聞いたことのないやうな國、軍艦で擊つて來いと云つても、軍艦どころではない、機關銃一つ有つてゐないやうな國も入つて居る。こんな小國の數者がギャア〳〵騒いでも問題にはならない。初めから出來損なつて今や影の薄い聯盟だ。この聯盟を飛び出したから問題が起るなぞゝは、それは臆病神に取りつかれた人間の言ふ文句だ。（拍手）

然らば聯盟の委任統治に付ては何處からも日本に文句を言ひに來るものはないかと云ふと、な

いと即斷しては可くない。凡そ日本の如き大國に向つて、日本の生命線とも認められて居る重大なる土地の問題（必ずしも土地の問題でなくても）で文句を入れようと云ふのには、二つの條件を備へなければならない。その一つは、其の土地に對して利害關係を有し、日本に有たして置くことを迷惑とし若くは危險を感ずる立場に在る國でなければならない。それだけでは條件が足らない。もう一つの條件は、從つて之を日本から取上げるなり叩き落すなりする決意を有ち且其の決意を實行に移す武力を有することが必要である。今日世界の强國中の强國たる日本に向つて、あれを返せなぞゝ言つて來る時には、言ふと同時に飛行機と軍艦をチャント持つて來なくちやいけない。大學の法理研究室の議論ぢやあるまいし、自分の所に緣もゆかりもないのに、法理上あれは取上げなくちや不可ないなぞゝ、野次馬論を吐く者は、支那なぞに雇はれた小國連中だ。あんな連中が何を言つても蚊が鳴く程にも感じない。（拍手）

然らば現在、日本に有たせることは國策上一種の不利或は甚しく脅威を感ずる國ありや？　そんな國がありとすれば何國であるかは、我輩が名前を擧げずとも、諸君は太平洋の地圖を披いて見れば直ぐ判る。（拍手）その國が態て自己の決意を實行するに足ると信ずる程度の武力、言ひ換

へれば、海の上のことだから西太平洋まで來て彼處から日本を逐拂ふだけの海軍力が備はつた時には、乃至備はつたと彼が自信した時には、ヴエルサイユ條約の規定がドウあらうと聯盟の決議がドウあらうと、必ず來るものだと日本としては覺悟しなければならない。（拍手）

滿洲問題は

次に滿洲問題、歐米各國の先生達も滿洲問題ではちとやり過ぎて實は手を燒いて居る。滿洲問題は今、一口に云へば、この赤ん坊はネンネして居る。折角向ふが眠らして呉れて居るのを、態々日本から誤解を解きにと云ふので頭を下げて、赤ん坊を起しに行く馬鹿があるものかと言ひたい。今のアメリカは、一九二九年年以來、全人口の一割强千四百萬人が失業者、その家族をも合せれば無慮三千萬の人間が、中央政府・地方政府・慈善團體及び個人の慈善家から、日本流に云へばお粥の焚出しを受けて居る。今日では大統領に一種の獨裁權まで與へ非常な工作……と云ふよりは實驗を行つて居る。アメリカ人の所謂ニュー・ディールだ。併しNRA政策の効能も中々顯はれない。ルーズヴエルト執政以來既に一年半、漸く時局匡救事業のお蔭で、千四百萬の失業

者を四百萬だけ減らした。併し其の事業費がなくなつてしまへば四百萬は再び失業組に戻つて來るのだ。大統領の新經濟政策に依る國內不況の打開が若し出來なければ、次に來るものは、アメリカの經濟制度の破綻のみならず、或は社會機構に大きな罅が入るやうなことになるかも知れない。一度はスティムソンの時代に世界第一位の大海軍をホノルルまで持つて來て、足かけ三年間の長きに亘つて軍艦の展覽會をやつて居つたけれども、日本はビクともしない。熱河も征伐すれば平津地方にも踏み込んで行く、上海でも堂々とやつつければ、遂には滿洲を帝國にまで拵へ上げたではないか。（拍手）而かも今のアメリカは滿洲問題どころではない、國內の不況打開で精一杯なんだ。況んやヨーロッパに至つてはアメリカ以上の狀態だ。滿洲問題は好い鹽梅に眠つて居る。さうかと思ふと一方には、南米の何とか云ふ小國が、率先してと云ふのか、面當が多分にあるのだらうが、滿洲帝國を承認した。承認されない事が直ちに其の國と戰爭を惹起する原因になるのではないかなぞと考へるのは餘程物事を知らない人だ。國際間に出來た事態或は或る國が拵へた一の事態の承認を他の或る國が拒絕することが、直ちに以て敵意の表象とはならない。之は外交常識として國民は心得て置くべきだ。

斯く申す日本は、ロシヤが東清鐵道の敷設權と旅順・大連の租借地を得た當時、ロシヤから觀れば東洋の二等國日本に向つて、滿洲に於けるロシヤの鐵道敷設權と遼東半島租借權とを認めて呉れゝば朝鮮問題の方は色を付けますと、再々誘ひ來つたけれども當時の我政府は之に頑として耳を傾けず、徹頭徹尾承認を拒絶して遂に日露戰爭に至るまで頑張り通した。彼が頻りに誘ふ當時、日本の軍艦は旅順に行かなかつた。行けば禮砲を放たなければならないからだつた。併し、ひとたび行くことになると、東鄕さんが軍隊を率ゐて行つて大きな御馳走を食らはした。(拍手)

またイギリスは明治十五年か十六年かにエジプトを占領して統監政治を布いたのであるが、フランスは之を明治三十七年まで否認し通した。之等の例に依つても明かなる如く、新國家の承認拒絶といふことは畢竟、事情の變化に應じて自己に有利なる行動を爲すの餘地を豫め留保すると云ふ意味以上に出るものではない。だから、滿洲國承認を何處もしないからとて、何も怖がることはない。承認して呉れないことが日本の危機でも何でもない。それが危機に轉化するや否やは他にある。即ち今ロシヤが世界第一位の陸軍・空軍を擁して、御承知の通り日本が怖いから其の精鋭を極東方面に持つて來て、今日では極東に於ける日露の陸上兵力は我に不利な情勢になつて

居る。今日ロシヤが世界第一の陸軍・海軍を有つて居るのは、お腹の空いた病人が正宗の利劍を振り廻して居るやうなものだ。(拍手)と云つて、日本の對露兵備を好い加減にして置けと云ふのではない。ロシヤの陸軍の武裝の現代化が百パーセントならば日本は少くとも七十五パーセント位に現代化をしなければならぬ。陸軍當局が遠慮し過ぎて居るやうだから陸軍の必要なる豫算は早く通してやらなければいけない。先方は病人だけれども、併し其の持つて居る武器は大したものであることを忘れてはならない。

斯くの如く、滿洲國不承認が果して帝國の危機化するや否やは、先方が我に向つて或る行動に出るだけの實力……主として武力並に環境が備はつて來た時には危機になる。故に宜しく之を危機化せざるべく、敵の來らざるを恃まずして我の備へを全うすれば、承認は拒絶して呉れても心配はない。その方が或は日本に都合が好いかも知れない。(拍手)

三十五—六年の危機とは

然らば三十五・六年の危機なるものはないのか。大いにある。演說の劈頭にも言つた如く、日

本が遭遇する危機は如何なる場合にも主として海に於てゞある。之が最後的解決は海に於ける日本の力如何に依存するものなることを茲に斷言して置く。(拍手)この海に於ける日本の力が、彼の華府條約・ロンドン條約に依つて如何なる立場に置かれて居るかを國民は冷靜に反省しなければならない。而して來年の軍縮會議に對して日本は何を得べく望むか？　これが會議に對する積極目標である。消極的には、日本は逐ひ除けなければならないことがある、取り付けなければならないこともある。之は最近まで……否現今と雖もハッキリして居らない。それは即ち、一つは帝國の國防自主權の恢復と云ふことである。この堂々たる大日本帝國が、實は華府條約から引續きロンドン條約に依つて帝國海防の全面に亘り、對手國の作戰部の考案に基ける劣敗比率を押しつけられて、國防自主權の制限を受けて獨立國家としての實なき狀態に在ることを諸君は確認しなければならない。とかく海上の事になると國民は迂闊である。例へ陸軍に引けば判り易い。日本を假想敵國として向ふでも軍備をして居る國と日本との間に、向ふが注文した通りの條件、即ち、日本は騎兵は何十個中隊以上有つことはならぬ、砲兵は重砲何百門、普通の大砲は何百門、飛行機何臺、タンク何車、輕機關銃何挺と云ふやうに、陸軍の各兵科に亙つて其の兵器並に兵力

に對して、向ふの注文通りに條約で縛られたとしたらどうする。此の譬ひを海軍に移して考へれば判る。日本は華府條約では主力艦と航空母艦とを六割にされた。陸軍で云へば最も重要なる兵科二つを制限されたことになる。而してロンドン條約で今度は、八吋砲を載せる所謂甲級巡洋艦(大型巡洋艦)以下、輕巡、驅逐艦、潛水艦等、海上兵力の有らゆる部隊及び此の部隊が有つ所の武器まで全部的に束縛制限を受けて居る。即ち帝國海防の全面に亙つて束縛されて居るのが華府條約及びロンドン條約である。國家は永い生命のものであるから、時の勢ひ已むを得ず、一時的に斯う云ふ酷い條約を受付けたと自ら强いて慰めることも出來るであらうが、今度は横の制限に加ふるに縱の制限、即ち時間的に永久化しようと云ふ米國の政策を押しつけられて來年の條約に判を捺すことがあれば、横には帝國海防の全面に亙り、縱には幾年毎に切り替へて結局時間的に永久化せられたる制限となる。これ即ち國家獨立權の制限であり國防自主權の剝奪だ。故に來年は、獨立國として當然の權利である國防自主權を恢復しなければならない。然るに近來、比率の增加要求といふやうに不正確な用語が使用されるから、國民は惑はされるし、既に對手國から反對宣傳をやられて居るが、比率じやない、これより重大なより根本的なもの即ち國防自主權の恢

復を要求するのだ。國防自主權の恢復と云ふことは必ずしも兵力の數量的對等と云ふこと、同意味ではない。時と場合に依つては、對等どころではない、夫よりも造るかも知れないが、要するに、今受けて居る國家當然の權能に對する制限束縛を脱却しようと云ふのだ。

國防自主權

斯くの如くにして恢復する國防自主權を如何に運用し、如何に艦船や武器の上で具體化するかは、帝國固有の環境と經濟と、用兵作戰に於て世界に優れたる我が海軍の頭腦と、世界に最も誇るべき帝國海軍の造艦術とに在る。云ひ換へれば、吾人國民は國防自主權の具體化及び運用の程度如何は、時の内閣を信用する勇氣はないけれども、帝國海軍に絶對信頼を置いて一切を委せれば可い。（拍手）また外國に向つては此の國防自主權を如何に運用するやに付ては、帝國傳統の平和主義なる國策に信頼しろと言ひ聞かされば可い。

一體、一國の艦隊が、自國を防衛することを主なる使命として出來て居るか、自分の國策遂行の爲には進んで他國を擊ちに行く所謂攻勢的作戰に適するやうに出來て居るか、此の何れてあるかは、其の艦型を見れば判る。例へば米國の主力艦は航續力二萬五千浬を有する。本國の軍港を出帆したまゝ途中で燃料を補給せずに行ける極限をもつの言葉で航續力と言ふ。二萬五千浬は地球の赤道と同じだ。これは即ち米國海軍政策に示してある如く太平・大西兩洋の何處でゞも作戰せんが爲てある。而して一國若くは二國の聯合艦隊を西太平洋に於て擊破するに足る大海軍を造る政策てあると云ふことをアメリカは年來チヤンと國民に示して居る。西太平洋に對して攻勢的作戰に出るアメリカが、攻勢的武器たる航空母艦を多く造るのは當然てある。またロンドン會議に於て日本全權がボンヤリして居る間に成立させられた――二割五分てあつたと記憶するが飛行機發着用甲板を有する巡洋艦も、進んで他を擊ちに行く攻勢武器てある。然るに日本の軍艦は如何と云へば、航續力の點に於ても向ふを擊ちに行くやうに出來てゐない。帝國の經濟的並に國家的生活擁護の爲に、西太平洋の絶對必要なる最狹範圍に於ける制海權を他國に掘らせない、所謂消極的防衛に適合する如くにすべての軍艦が造られて居る。斯う云ふ點を今までの軍縮會議てアメリカに突込んだのを私は聞かない。（拍手）

現今の世界の大國で國防自主權を制限されて居るのは日本とドイツてある。併しドイツは、故

なく私意に基く侵略的戰爭を敢てして世界平和を破壞したと云ふ國際犯罪に對する制裁として、ヴェルサイユ條約第五篇に依つて國防の片務的制限を加へられて居るのである。夫てすら條約實施以來十六年目になつて、たとひ國際犯罪の制裁としても、人口六千萬を有する大文明國に對して國防自主權を制限すると云ふことは國際正義に反すると云ふので、一昨年の暮に英米が主となつて、イタリー之に贊成して、嫌がるフランスを說きつけて、ドイツの要求する國防自主權は主義に於て之を恢復させると云ふことを、四大國がドイツに通牒して居る。その國防自主權恢復方法の具體的な順序に付てフランスとドイツの間に折合が付かないで、遂にドイツが軍縮會議を一蹴し、聯盟を飛び出した。國防を制限するのは國際正義に反するの故を以て、國際犯罪國にすら之を還してやらうと云ふ說を出して、主義上なりと雖もフランスに同意さしたアメリカとイギリスが、日本に向つては寧ろ、帝國海防の全面的制限を時間的に永久化せんとするのは、即ち帝國の國防自主權を將來に向つて剝奪するものである。（拍手）

來年の會議に於ては先づ此の點を反駁しなければならない。國際正義を測る定規が、人種の黃白、洋の東西に依つて、違ふので御座るかと詰め寄れば、彼等と雖も一片の良心を有するが故に

今度の日本の言分は痛い所を突いて來たわいと、彼等の態度が變つて來るに相違ない。（拍手）日本は此の絕對不敗の論據に立つて我が主張を突張るべきである。諸君は或は其の突張つた結果を心配されるだらう。なるほど突張れば會議は當然不調となる。不調となれば華府條約もロンドン條約も共に失敗するから、茲に國防自主權を恢復して我が目的は達せられる。焉ぞ不調を恐るの要あらんやだ。（拍手）

次に消極的な方面としては、一口に云へば、往年の華府會議たらしめてはならない。軍縮の前提條件として極東問題を始末しなければならないと云ふので、支那問題殊に滿洲問題をクッ附けて來ようと云ふ意嚮であることは今日既に仄見えて居る。之は斷じて許してはならない。若し之に引込まれるならば、何の爲に聯盟を脫退したのか判らなくなる。滿洲問題、日支間の專屬事件、東洋の問題、之を、東洋に向つて少しばかりの商賣をして居る小國連にまで容喙させる必要は絕對にない。彼の九國條約は、イギリス・フランス・アメリカ・イタリーと云ふ所謂大國の連中ばかりでなく、ポルトガル・ベルギー・オランダまで連れて來て日本の手を縛つた。それをモウ一度ポルトガル・ベルギー・オランダまで連れて來て、今度は其の上ロシヤまで入れるだらう、そうして

ワシントンやロンドンまで引出されて、各國の新聞記者の監視の前でギュー〳〵油を搾られて、擧句の果に十國條約に判でも捺したならば、目も當てられない……では今度は濟まない。國内情勢が許さない。（拍手）凡そ國際關係に於て或る程度まで讓つても差支へない事でも、斯かる讓歩を敢てするの結果として、忠良純眞なる國民の反感を刺激し、甚しきは民心の不滿・紛擾を招くが如き憂ありとすれば、國内の治安維持上、斯かる讓歩は斷乎として拒むのが政治の常道である。（拍手）

彼のロンドン條約を締結せる結果、外交軍事の方面に及ぼせる不利の影響に付ては最早今日誰も疑ふ者はないが、ロンドン條約締結の結果が日本の國内に如何なる恐るべき且つ悲しむべき事態を惹起したかは、未だ諸君の記憶に新たなる所であつて、私は此の目出度い日に諸君に何々事件を想起せよとは言はないが、若し來年の會議で又もやロンドン條約と似たり寄つたりの軍縮條約に判を捺したならば、國内に悲しむべき事態が起らないと何人が保證し得るか。（拍手）此の席には、見渡したところ、陛下の股肱たる軍人も澤山居る。抑々　明治天皇、寶算御十六の幼冲を以て御位に卽かせられ、慶應四年御踐祚の時の國民に對する御諭の中に、畏くも至尊御自から其

の心志を御苦めになつて億兆を綏撫し給ひ、皇國を富岳の安きに置かせられ萬國と對立させて皇威を四海に宣べんとの御覺悟を宣はせ給ふて居る。爾來四十有餘年間　陛下の御指導の下に拮据經營して、東洋の一小國より宇内の雄邦の而かも第一線に進んで、不平等條約を撤廢し、東洋平和の盟主となつた。此の日本の命の鍵である國防自主權を、昭和の今日、來年の會議で再び束縛されるやうなことになつたならば、畏くも明治の皇謨を我々が汚し奉つたことになる。政府も國民も宜しく此の事に思ひ及ぶべきである。（拍手）

昨今、支那は三十六年が來たらと云ふので空軍擴張に熱中して居り、ロシヤは三十五・六年には日米の衝突があると云ふので兵を出すと宣傳して居る。支那もロシヤもアメリカの懷（ふところ）相手に餘計な徒らをして居るのだが、そのアメリカの懷も、極く通俗的に考へても、三十五・六年には必ずしも日本に押しが效かない。一九三五年の日本は昭和四年のロンドン會議當時に於ける日本とは別の姿であると云ふことを示せば、支那も生意氣を言はなくなるし、ロシヤも徒らをしなくなり、從つて東洋の平和は茲に確保されて、折角昭和六年九月以來着手せる我々の大事業が健全順調に發達することは、假に私が責任者の地位に身を置いて考へても歴々として成算がある。

國民は今や日露戰爭以上の微妙複雜なる非常時に直面して居るけれども、明治以來の國運發展のお蔭で、事態の認識と帝國の存在價値を自ら認めさへすれば、國家の權威と平和とを共に全うして三十五・六年の危機を突破することが出來るのである。（拍手）

昭和九年六月十八日印刷
昭和九年六月二十一日發行

定價金拾錢

編纂兼發行人　東京市麴町區九段一ノ五　軍人會館事業部　右代表者　小原正忠
印刷人　東京市麴町區九段一ノ五　横山才四郎
印刷所　東京市麴町區九段一ノ五　財團法人軍人會館印刷所

不許複製

發行　東京市麴町區九段一ノ五　財團法人軍人會館事業部
振替口座東京二〇〇七番

終